

林業労働のための職業教育

Fay Lundh Nilsson（著）

ブロムベリ・ニクラス*¹，横山悦生*²（共訳）

1950年代と1960年代から出現した職業教育の中に、際立った特徴をもつ、高度に専門化したものがある。本稿では、その一例である林業の職業教育の展開に焦点をあてる。林業はかなり以前からスウェーデン経済において重要な位置をしめてきた。林業においては20世紀後半に従来の手工業的な方法が現代的な技術によって置き換えられ、しばしば急速な技術発展が見られた。林業における職業教育の発展過程は1950年代と1960年代における大規模な拡張と、それにつづく高校制度の枠内への統合を伴った。

本稿では、林業の職業教育がいかに発展し、その教育の形態や内容について異なる理念が数十年間にわたり併存し、1970年代初頭にはじめて統一化された職業教育になったかを述べる。林業の基礎的な職業教育が当時の多くの他の職業教育と同様に発展したことから多くの示唆が得られる。これによって技術の発展や労働市場の実態、一般的な経済の発展とかかわりあって、スウェーデンの職業教育の特徴がいかに生み出されたのかに示唆を与える例となろう。

先行研究と、資料、研究方法

林業に関する問題を扱う文献は多く存在する。林業の職業教育に関するものは、1940年代から発展した多様な教育の全体像を描く試みはほとんどない。一つの例外は『スウェーデンにおける林業の職業教育 (Skogsyrkesutbildning i Sverige)』（1975）であり、これは本研究にとって1971年の高校改革以前の状況に関する重要な史料となった。1950年代と1960年代には国家や産業界や労働組合運動において、現代的な職業教育を構築することが共通の関心となっていた。より効率的な教育への要望により調査委員会が設置された (SOU 1954:11; SOU 1966:3)。林業の職業教育については1960年代後半に二つの調査報告書が出された (SOU 1965:67; SOU 1967:38)。林業の労働組合運動は教育問題に大きな関心を示し、労働組合の機関紙である『林業労働者 (Skogsindustriarbetaren)』誌に多くの論文が掲載された。これらは、林業に関わ

る労働が大きな技術的变化を経た時期において、林業労働者の教育の課題に関する労働組合の見解の推移を読み取ることができる。林業の職業委員会 (SYN) の史料の利用によって、林業の職業教育が高校に移された1971年の高校改革の際に林業の関係者が教育問題をどのように捉えていたかを読み取ることができる。これらの史料やいくつかの出版物の検討に加えて、林業問題や林業の職業教育問題について6名の関係者に対してインタビューを行った (付録2参照)。

林業の職業教育の経済史的な位置づけ

1800年代半ばからのスウェーデンの経済的発展は、「生産における急激な変化と革新の局面」(Omvandlingsfas) と「生産における合理化の局面」(Rationaliseringsfas) が繰り返される構造的循環 (strukturcykel) として捉えることができる。本研究が対象とする時期である1940年代初頭は、30年代頃に始まったスウェーデン経済の変化の局面にあった。これは1950年代半ばまでつづいたが、工業のみならず農業や林業のような伝統的な産業にも影響を及ぼしたところの生産技術の広範な変化の時期として特徴づけられることが多い (Schön 2012)。農業ではトラクターやトラック、搾乳機の利用による機械化や効率化が戦間期に早くも開始された。第二次世界大戦後、農業における生産性が急激に増加した (Schön 2012)。一方、林業では農業と同じような技術革新の影響はなかった。Schönによれば、林業における生産方法の機械化が遅れたのは、製材業における技術発展の弱さによる。このことは1950年では第一次世界大戦前の生産高を超えなかったことに反映されている。Schönによれば、森林での労働の組織については1940年代半ばにおいて「注目すべきことに産業革命前と同様の実態が変わらずに」つづいていた (Schön 2012, p.431)。

これはその後変化することになる。林業において労働力を確保することが困難になるにつれ、さまざまな作業要素および運搬の合理化への圧力が高まった。1950年代半ばにスウェーデンは1970年代初頭にまで

* 1 名古屋大学大学院生

* 2 名古屋大学大学院教育発達科学研究科教授

つづく合理化の局面に入った。林業では合理化は最初徐々に進んだが、チェーンソーやトラクターが本格的に登場すると林業においても生産性が向上した。生産性の向上は1960年代後半にとりわけ顕著になり、労働生産性は農業では年間に7%増大したのに対し、林業では年間12%以上増大した。その時点では機械化はまだ完了しておらず、それは1970代末まで待たねばならなかった (Schön 2012)。このプロセスは林業における職業教育 (skoglig utbildning) の展開を検討するための背景としておさえておきたい。

1940年から75年までの期間に職業教育は大きく変化した。当初は経験ある労働者から労働現場において訓練を受けることが一般的な方法であった。やがて職業教育が高校制度に統合されると、それは労働生活からかなり遊離し、より理論的な性格をもつようになった。このような全般的な傾向は林業の職業教育を分析するためのもう一つの背景である。

職業教育の変化は工業や産業界において徐々に現れた要求への対応であり、それらの代表者は職業教育の内容編成において大きな役割を果たすようになった。もう一つの重要な利害関係者は労働組合運動であった。したがって、林業における職業教育の展開は、産業界と労働組合運動が代表する利害によるものとも見てよい。これはこの時期に職業教育がいかに変化したかを理解するためのもう一つの背景である。

ノコギリやオノ、バークスパッドから収穫機やフォワーダーへ

森林における作業は、スウェーデンの木材の輸出が盛んになった19世紀後半に発達した手工具で1950年代までは行われた。すなわち、ノコギリ、オノ、バークスパッドを使って伐採していた。各林業労働者は自分の道具を所有し管理していた。今日からみれば道具は単純といえるかもしれないが、道具の管理は自分のノコギリの手入れすることを意味し、生産性に大きく影響した。これは出来高払いで働いた労働者にとって重要なことであった。

1930年代末には林業の生産性を向上させるための作業研究を行う二つの組織、SDA (Föreningen Skogsarbetarens och Kungl. Domänstyrelsen Arbetsstudieavdelning) とVSA (Värmlands Skogsarbetsstudier) が創設されたが、機械化が普及するまでにはかなりの年数が必要であった。Anderssonによれば、「『古い』技術はその改良によって技術革新よりも競争力があつた」(2004, p.106)。改良された道具とと

もに古い方法が残っていたのは伐採の作業のみではなかった。伐採場からの木材の運搬は馬車が長い間使用され、川が重要な運搬路でありつづけた。道具と同様に効率化された馬車も使用された。以前では積雪の林道でのみ木材を運搬できたが、皮をつけた車輪の馬車によって雪のない道でも運搬することが可能になった (Andersson 2004, p.104-107)。

1950年代と1960年代に林業における利益率の低さは労働手段の合理化について強い関心を生み出した。最初の改善は運搬を容易にし、効率化することであった。道路工事のための機械が導入され、林業のための道路が作られ、馬車をトラックに置き換えた。伐採の作業では、樹皮をはぐ作業が時間的にも身体的にも手間のかかる作業であった。1950年代初頭に樹皮をはぐ機械の導入によってバークスパッドが不要になり、生産性が倍になった (Andersson 2004, p.107-108)。

一人で操作できる最初のチェーンソーは1940年代末にスウェーデンに導入されたが、その普及までには時間を要した。それにはさまざまな要因があつた。第一に、チェーンソーは当時高価であり、作業道具を管理していたのは各林業労働者であった。チェーンソーの購入は一人の林業労働者にとって大きな投資であった。それは当時1200クローナであり、林業労働者にとって月給の約2.5倍に相当したと、1955年に初めてチェーンソーを購入したÅke Petterssonは証言している。第二に、初期のチェーンソーは重かった。20キロ以上の重さは珍しくなかった。第三に、スウェーデンの寒い気候により、チェーンソーを起動させ途中で停止させずに操作を続けることは大変なことであった。「チェーンソーが来て、そして消えた」という『林業史誌 (Skogshistorisk tidskrift)』に発表された論文では、次のように語られている。

「チェーンソーを持っている人と私は食事の用意をしていると、まもなく同僚が新しいチェーンソーへの関心から集まってきた。約10インチのもみの木を切ってみた。(中略) 倒れるまでは3回も止まった。このデモンストレーションはあまり成功したとはいえない。」(Wallenius 1994, p.40-42)

技術の発展により、チェーンソーはますます軽くなり、途中で止まることがなくなり、1950年代末には切り倒し、切り分け、枝の切り落としの一部にもチェーンソーは使われるようになった (Hjelm 1991)。枝の切り落としについては、チェーンソーの使用が危険であると考えられたため、1970年代後半あたりまでオノが使用されていた (Wallenius 1994, p.41)。

やがて伐採においてチェーンソーが使用されはじめるとともに、運搬においても発展がみられた。トラクターは以前から使用されていたが、1960年においても馬車が荒地での運搬の80%に使用された。トラクターは林道でのみ使用が可能であった (Andersson 2004, p.109)。1960年代末に運搬においても機械化が急速に進んだ。トラクターは起重機 (griplastare) が設備され、全輪が油圧動力によるフォーワーダーが使用されはじめた。林業労働者研究財団 (Forskningstiftelsen Skogsarbetaren) は1968年に林業で使用されている運搬手段の数とその効率性を概算した。1966年に林業

における馬の数は16000頭であったが、その翌年には半分に減少した。簡単な設備のあるトラクターも減少した。この変化は材料の運搬作業の強力な効率化を意味した。以前にも簡単な設備のあるトラクターが年間で馬車より2倍の量を運搬することができた。起重機を設置すると可能な運搬量が7.5~8.5倍になった (Skogsstatistisk årsbok 1968, p.66)。材料の運搬の効率化へのもう一つの貢献としてクレーンが設置されたトラックがある。これらは以前の川による運搬を徐々に置き換えていった (Andersson 2004, p.109)。

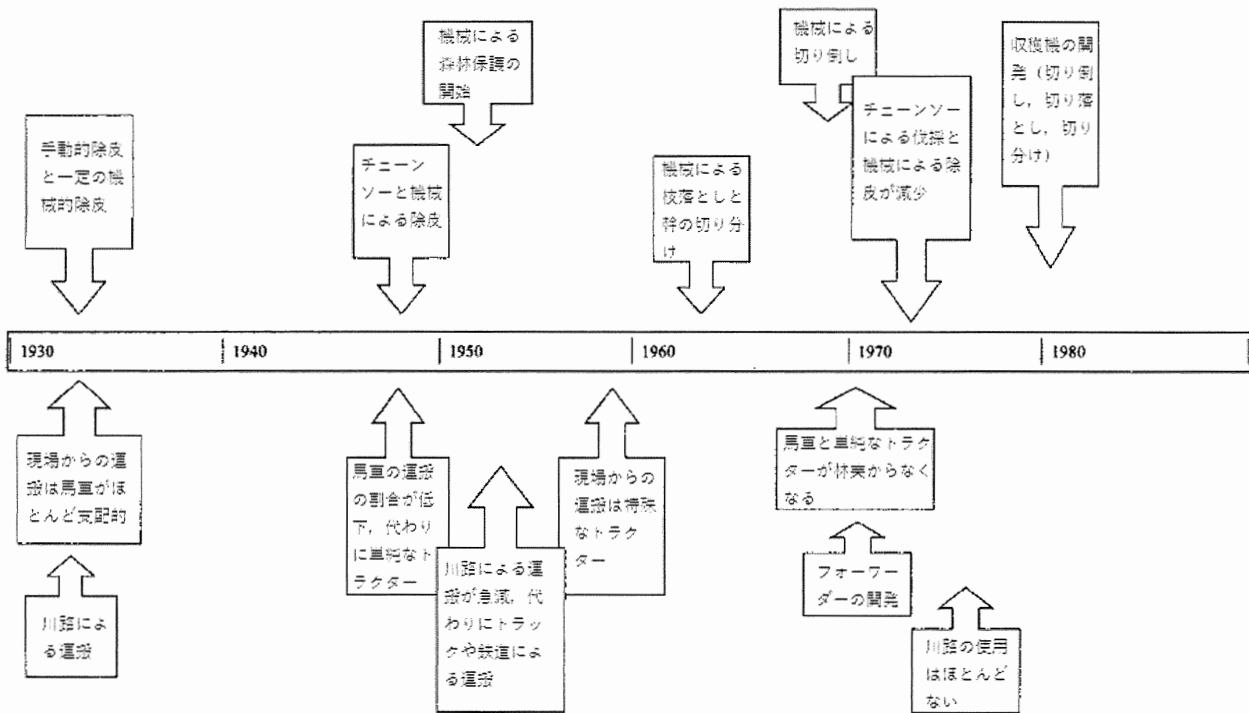


図3.1 1930年から1980年までの林業における技術発展。出典：Sjöstedt (1975), Andersson (2004)。

1960年代末に、プロセッサ（processor）という伐採のための移動可能な機械が導入され始めた。プロセッサは枝落としと切り分けもでき、木材を並べることもできた。1960年代中にスウェーデンにおける林業機械の製造が普及したこともあり、この分野でも技術の発展が早かった。ただ、切り倒しはその時までチェーンソーで行われ、1970年代半ばにいわゆる収穫機を用いることによってはじめて切り倒しの作業自体の機械化が始まった。

図3.1では、1930年代～1980年代の林業における技術の発展が年表で示されている。林業における新たな機械の開発によって林業の急速な合理化が行われた。1976年の林業統計年報（Skogsstatistisk årsbok, p.51）によれば、林業における機械化の割合は1972年に16%、1974年に24%、1976年に43%になった。

合理化によって生産性が高まり、林業における従事者の数が急減した。図3.2では生産量の発展が示されている。林業従事者数についてはその統計では解釈が困難である。この困難にはさまざまな要因がある。利用できる統計は個々の林業企業からの報告に基づいていたが、その報告は欠陥が多かったことから、その統計にはのちに補足や修正が加わった。もう一つの要因は林業における作業の分布が年間を通して均質ではなく、林業の仕事の傍らで他業に従事することが珍しくなかったことである。さらに第三の要因は機械化が進み始めた後の林業における従事者数の概算が困難であったことである。林野庁（Skogsstyrelsen）の調査は、1960年～1975年の間に従事者が約30000名減少したことを示唆している（Skogsstatistisk årsbok 1960-

1977）。

林業教育が始まる

本研究で扱う35年間においては林業教育の展開は直線的ではなかった。その期間において数種類のタイプの林業教育が同時に行われた。付録1ではこれらの教育が表の形式で概観的に示されている。

(1) 伝統的な教育とインストラクター活動

1940年代初頭では林業の作業はまだ完全に手動で行われ、基礎的な林業教育において理論的な要素をもつような、現代的な意味での職業教育は存在していなかった。森林地域の村では少年は家庭で実際の作業を手伝い、年長の従兄弟について森に行くなど、ノコギリとオノに馴染んでいた。学校卒業後、雇われて作業に参加し、先輩からアドバイスを受けるなどにより仕事に参加して一人前になっていった。この方式が1950年代に入った時点でもとられていたと、インタビューされた関係者の何名かが証言している。例えばÅke Petterssonは次のように語る。

「私たちが今いるTivedenの小さな村で私は育ちました。あの時代はこのような村にあっては小さな畑での作業が可能になったら働くことを学ばざるをえなかった時代でした。したがって夏期は作業が多かった。また冬期になっても森での作業がありました。しかし、1952年3月13日に私と従兄弟のLennartは職業として林業に就きました。当時Munksjö AB Aspaförvaltningと呼ばれていた企業で雇用されました。私は15歳の時、簡単な手工道具を使用することから始めた。最初

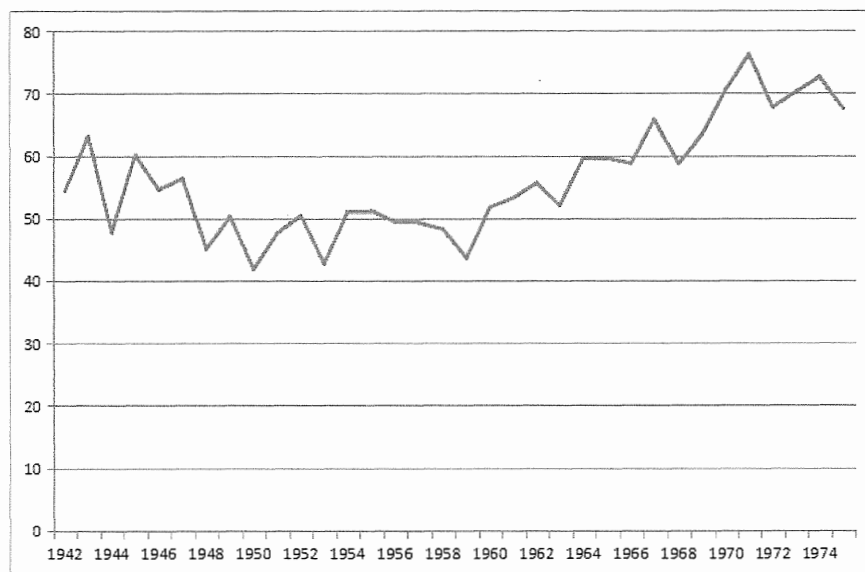


図3.2 1942年から1975年までの伐採量（100万立法メートル単位）。出典：Skogsstatistisk årsbok 1942-1977。

の仕事は伐採で材木が採られた後の残りを切る仕事でした。つまりパルプに使う材料を切ることで、それをしばらくは続けました。当時、サンドヴィークの丸ノコ盤やかんな盤を入手するところまでは到達していました。」

家庭で学んだことで十分に仕事に入ることができたかという質問に対してÅke Petterssonは「オノやノコギリは扱えた。仕事をするのが自然な一歩のようなものでした」と答えている。

1920年生まれで6年間の学校教育を修了した直後に林業の仕事始めたKjell Jonssonは「私より二倍の期間働いた兄から林業労働の技術を学んだ。当時は完全に出来高給でありました」と語っている。Kjell Jonssonはパルプになる木を切る仕事から始めた。「新規参入者」にはより低い地位しかなく、材木に利用される木を倒す技能は要求されなかった。それでも厳しい労働であった。

父親や兄、その他の男性である親戚は少なくとも林業がかつてのやり方で行われていた間は、初めて林業の仕事に就いた若者の教師として重要な役割を果たしたようである。1920年代の経済危機の結果、1920年代にインストラクター活動が導入されることになった。失業対策の一つの試みとして、失業した工業労働者が林業に投入された。これら工業労働者の多くは林業労働の経験がなかったか、あるいは経験のある場合でも少なかったために基本的な作業や道具の使い方について基礎的な指導が必要であった。他方、このインストラクターは木を切るための技能や道具の管理について教えるための特別な教育を受けたわけではなかった。インストラクターの活動は1930年代初頭まで行われたが、のちに戦争期に生まれた林業における労働力不足と関連して復活した（“Skogsyrkesutbildning i Sverige”, p.31-p.32）。1942年の森林統計では、林業においては正規の労働者といわゆる未経験労働者（ovan skogsarbetare）とを区別した。未経験労働者とは失業者、または林業で仕事するために雇用されている工業から許可を得た者であった。1942年にはこれらの未経験労働者は林業労働者のうち4分の1弱に及んだ（“Kungliga skogsstyrelsen” 1942）。

1930年代末には現職の林業労働者向けの一定のインストラクター活動も出現した。それは林業局（Domänverket）と林業関連の企業が生産性向上を図るために道具の保全について労働者に教育をはじめた（“Skogsyrkesutbildning i Sverige” 1975, p.32）。ノコギリの製造者もノコギリの効率的な研磨の方法を労働者に教えるためにインストラクターを巡回させた。

Kjell Jonssonは次のように語っている。

「彼らは仕事がとてもできる名人でした。例えば Sandvikens järnverkから一人の名人が訪問してきました。彼は非常に優秀で労働者を驚かせるほどノコギリを鋭く磨くことができました。Vidar Karlssonによれば仕事以外の面でも優れていました。話しやすく冗談がうまかったのです。話題が豊富でしかもノコギリで音楽を引くことができました。」

(2) 林業の職業教育に対する労働組合の関心

林業労働者組合は早くから教育問題に取り組んだ。この取り組みはその労働組合の機関紙「林業労働者」（Föreningen skogsarbetaren）に見ることができる。教育問題に関する最初の論文は林業局とこの「林業労働者」が主催したコースに関するものであった。このコースの目的は「労働監督者（arbetsstudiemän）」を教育することであった。彼らは道具の使い方や保全の最善の方法を林業労働者に教えるとされた（SIA 1938:12, p.3-4）。林業局と「林業労働者」との協働によって「よりよい道具と保全に向けて伐採者と労働監督者の関心を目覚めさせる」ための「伐採者のためのハンドブック（Handbok för huggare）」というパンフレットをその翌年に出版した。このパンフレットは「最近いわゆる作業の効率化に向けて歩み始めた第1歩である」と書かれている（SIA 1939:2, p.9）。作業道具はまだ伝統的な手工道具であった。林業での作業を効率化させるアイデアと期待があったが、そのアイデアは依然として以前の技術に基づいていた。

1930年代末には若年層の失業率が高く、とりわけ製材業やパルプ産業の合理化に伴って雇用の機会が少なくなった森林地域において高かった。当時の一連の論文では、この問題の解決策として労働力の需要が高い地域における職業教育の拡大が論じられた。そこでは「将来の職業教育の量や内容についての産業界の労働力に対する需要が決定的である」と結論され、産業における労働力の必要に応ずる教育を与える中央作業場学校に対する期待が大きくなった（SIA 1939:23, p.41; SIA 1939:24, p.6-7; SIA 1940:2, p.5-6）。当時林業労働者に対する特別な職業教育への関心が存在しなかったことが注目される。当時の関心は一般的な労働市場の状況や進行中のスウェーデン工業の構造的変化にあった。

(3) 企業学校（foretagsskolor）—1943年～1968年—

1940年代には林業の職業教育はより重要な役割を果たすようになった。林業の職業教育に対する関心の高まりは当時起り始めた求人問題の結果として見る事ができる (Kungliga Skogsstyrelsen 1943)。1943年のSIAの最終号では次のような結論がでた。

「今日の若年層の関心を林業の職業教育に向けるためには、林業を一つの職業にしなければならない。現在の林業がすなわち臨時的な仕事で不安定な生計ではあってはならない」(SIA 1943:25-26, p.9)。

2年後の論文において、当時は書記でのちに森林労働者組合委員長になるCharles Winrothは林業においては労働力不足になってはじめて林業労働者の教育の問題が注目されるようになったと述べている。そこでWinrothは林業労働者一人一人が自分の道具、ときには馬と馬車を所有しているという林業に特殊な労働環境に読者に注意を向けさせた。完全に出来高給であったために道具の保全や作業技術の無知は林業労働者の効率性を低め、労働者を苦しめた。このような場合は経営者にとっては同じ労働条件で林業労働者を採用するだけであった。このような制度のために林業の基礎的な職業教育に対する関心が林業企業に生じなかった (SIA 1945:24, p.9)。

1940年代と1950年代に規模の大きい林業企業が必要な労働者を確保するために自らの企業内学校 (foretagsinterna) を設立した。1943年に最初に学校を創設したのはMoとDomsjöであった。1943年から1956

年の間は10週間～14週間のコースのみであったが、1956年にはそれを2年制の徒弟学校に拡張した。生徒はその企業と関わりのある家庭から採用され、教育の修了後に正規に採用された。徒弟学校は基礎的な林業の職業教育について林野庁と協働しはじめると1961年に廃校された(「徒弟コース及び1年次と2年次における一般的基礎教育, 1956年～1971年」の節参照)。セルロース会社 (Cellulosabolaget) は信頼性のある独立した労働者を育てるために1954年に教育を開始した。翌年林業局は若者のための1年制の林業職業学校を5校開校した。教育期間は44週間であり、重点は伐採に置かれた。

これらの企業内学校は16歳から20歳までの若者を教育し、学校の期間と実習の期間が交互に置かれる教育モデルを用いたことに共通点があった。実践と理論の配分はさまざまであったが、原理としては同じであり部分的にドイツをモデルにしていた (Skogsyrkesutbildning i Sverige 1975, p.48-50)。図3.3に示されるようにこの教育が1950年代半ばに急速に拡大した。これは当然セルロース会社と林業局が自らの教育を開始した結果が重なったものである。とりわけ林業局が国内の5ヶ所において教育を開始し、この急増に貢献した。

(4) 林業に重点をおいた補習学校—1944年～1969年— 1918年の補習学校に関する民衆学校令改正によっ

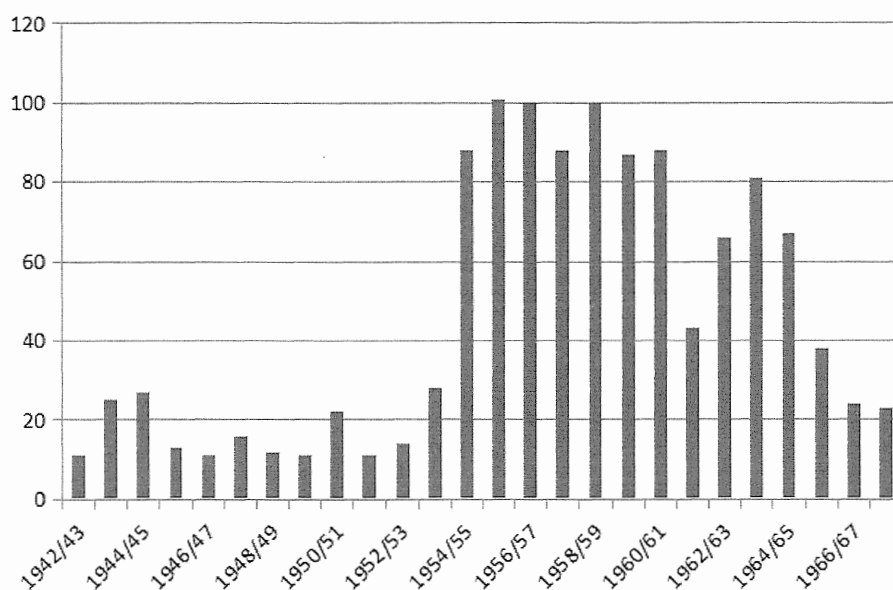


図3.3 1943年から1968年までの企業学校における生徒数。
出典: Skogsyrkesutbildning i Sverige (1975)。

て地域の需要に応ずる職業準備教育を編成することが可能になったので、民衆学校の枠内における林業の教育は20世紀初頭には可能性として存在していた。この教育は2年あるいは例外的に3年に分けることができ、最低360時間を必要とするものであった。1928年から7年間の通学義務のある民衆学校に1年制の補習学校を設置することが可能になった（SCB Promemori or1974:5）。

1940年代に林業界がイニシアティブをとり民衆学校と共にその教育を開始したことによって林業教育はその急激な発展をみた。林業界がすべての実践的な部分を担い、学校局は経済的な責任の大部分を担った（“Skogsyrkesutbildning i Sverige” 1975, p.42）。図3.4に示すようにこの形態の教育への関心は緩やかなスタートの後に1950年前後から急激に増大した。補習学校が統一学校に置き換えられはじめるまでに3500名の生徒が林業関係の補習学校に通っていた。1947年のSIAに掲載された論文ではMunksunds会社の林業部長であるFolke von Heidekenがインタビューされ、同社とÖverkalix補習学校との連携について熱心に次のように語った。

「職業に対して興味をもたせ、理解させることが重要です。つまり、ほかの職業と同様に林業労働は知識が必要な職業であることについて目を開かせることが重要です。林業労働者になるために必要とされるのは、健康な身体、オノとノコギリのみであると人はこれまでも現在も考えているが、そうではなく、優秀な労働者なしには林業において作業の改善や合理化を行うことはできません。」（SIA 1947:1, p.18-19）

(5) 若者のためのコース (10ヶ月) —1947年～1956年—

1956年に林業局が企業内学校を創設したときに、1947年に開始した10ヶ月間のコースによってすでに若者の教育の経験が蓄積されていた。一般的な企業内学校と異なり、15歳から17歳までの生徒は職業紹介所（arbetsförmedlingen）を通じて10ヶ月間の若者のためのコースに採用された。その教育は当初は長すぎるとみなされ、生徒の採用が容易ではなかった。生徒数は年間11名から12名に過ぎなかった。林業局が上述の企業内教育を開始すると10ヶ月間の若者のためのコースが企業内教育の一つに吸収された（Skogsyrkesutbildning i Sverige 1975, p.44-45）。

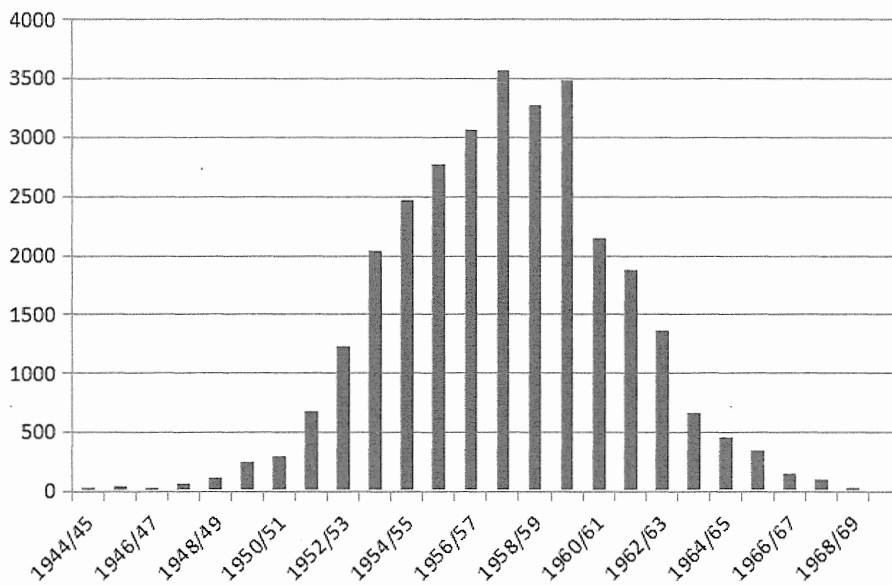


図3.4 1944年から1969年までの林業補習学校における生徒数。
出典: Skogsyrkesutbildning i Sverige (1975)。

(6) 林業の若者のためのコース (12週間) —1949年～1962年—

林業労働者の採用難のもう一つの解決策として、12週間の若者のためのコースがあった。1949/50年に林野庁と森林保護局の管轄のもとでそのコースが開始された。このコースは当時の感覚で多くの若者にとって長すぎるとみなされた。最初はコースの対象である16歳から20歳の生徒を採用することが困難であるので次第に9週間から11週間に縮小されることになった。

企業内学校のコースと同様にこのコースは次第に1学年における基礎教育と徒弟コースに置き換えられた(“Skogsyrkesutbildning i Sverige” 1975, p.46-47)。図3.5が示すように、1958/59年までは生徒数が増加する傾向にあったが、その後は急減する。開始当初の採用難にもかかわらず、12週間コースは上述の10ヶ月間のコースよりも著しく多くの生徒を集めた。1958/59年に生徒数が最大になり、それは800名であった。

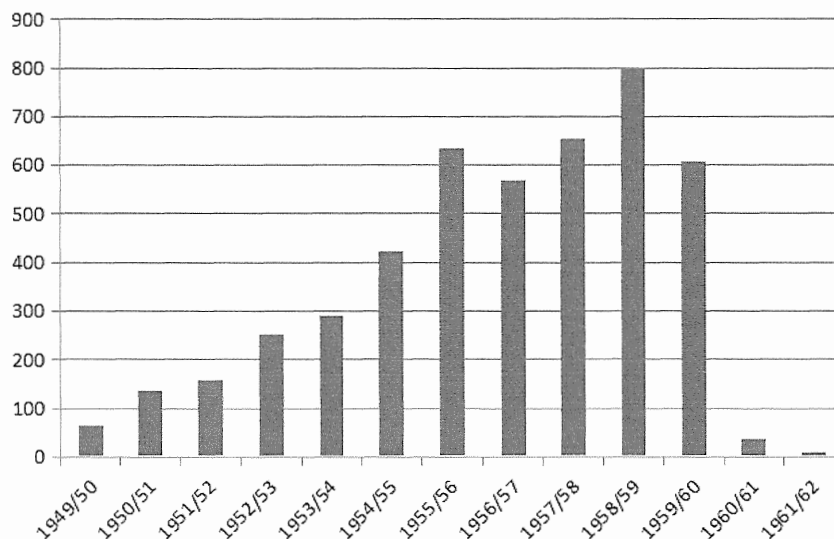


図3.5 1949年から1956年までの林業の12週間の若者コースにおける生徒数。
出典: Skogsyrkesutbildning i Sverige (1975)。

1950年代と1960年代の教育の施策

1940年代半ばに国家が農業と林業の教育に関心を示し始めたとき、林業は技術的な観点から発展が遅れていたことは明白であった。農業分野では機械の保全やトラクターの運転が必要であったのに対し、林業の分野ではまだ伝統的なやり方が支配的であった(SIA 1946:1, p.2)。1950年代に二つの教育施策が始まり、一つは1学年と2学年をもったいわゆる基礎教育、他の一つは統一学校の農業・林業ライン9yであった。前者は1956年から1971年まで、後者は1953年から試行として始まり、10年後に基礎学校の枠内における「9ライン林業」として本格的に実施された。

(1) 労働不足と職業教育に対する新たな要請

1940年代にすでに存在した林業における労働力不足は1950年代初頭においても依然として問題であった。林業労働者の高齢化が進行中であった。30歳を超えない林業労働者の割合は林業全労働者のうち1930年に50%であったのに対し、25年後には39%であっ

た。1950年代初頭にはフィンランドから林業労働者を採用し始めなければならない状況が生じていた(Skogsstatistisk årsbok 1951)。労働組合の側から国家も林業企業も林業の職業教育への投資を増すべきという議論を提出していた。他の産業においては既に職業教育について労使間の協働が始まっていた(第2章参照)。林業教育への国庫補助金はこの時期において農業のその10%にすぎず、現職の林業労働者が申請できる奨学金は賃金の上昇につれて著しく空洞化されていた。しかし、経済的な問題だけではなかった。教師問題がもう一つの解決を要する緊急課題であった。林業の職業教育を担う機関であった林野庁はこの問題で林業の大企業からの信頼を得られず、補習学校が高い評価を得た(SIA 1952:16, p.9とp.21)。このことはおそらく林業企業とこの学校形態との緊密な連携の結果であろう。

職業教育に対する林業の労働組合の関心は当然林業労働の職業に対するステータスの向上を実現することにあつたが、森林県の人間、特に最北の地域の間人が

人口密度のより高い県の人間と同様の質の教育を受けることができることにあった。これは国家によって不公平に扱われたと労働組合がみなした林業の基礎教育の問題であった。Winrothによれば、地方の産業において労働市場に実際に需要がない教育を若者が選択する傾向があった。このことによって林業の村から必要な若年労働力の輸出が強いられることが林業にとってだけではなく、その材木の販売に依存しているコミュニティにとっても弊害となっていた（SIA 1950:20, p.9）。

林業企業には効率性を向上させる余地も多かったので、労働組合と使用者は教育問題について少なくとも部分的に類似の関心をもつようになった。そうなったもう一つの理由は森林県において教育が労働市場に作用することに関心があったことである。SIA（1952）に掲載されたWinrothの論文は、労働市場庁の任務を受けた調査委員会がまもなく提出する提案への支持とみなすことができる。その提案は地方レベルと中央レベルにおける林業教育の調整を目指した。地方レベルでは林業職業教育委員会（Skogsbrukets yrkesutbildningsnämnder）、中央レベルでは林業中央職業教育委員会（Skogsbrukets centrala yrkesutbildningsnämnd）が設置されるとされた。

1950年代半ばには林業教育への補助金がかなり上昇した。基礎教育が森林の伐採も森林保護も含むとされたことによって、仕事のない時期や不況の時期において仕事へのさらなる機会を提供することになり、労働組合側からは肯定的であった（SIA 1954:10, p.3）。同時に統一学校の実験活動が論じられた。林業の労働組合は教育部門を民主化し、実践的な職業の地位を高める手段として統一学校を強力に支持したが、将来の労働現場としての林業を生徒に選択させることが深刻な問題であった。1955年のSIAのクリスマス号に北スウェーデンの新たな林業の学校についての報告がなされたが、そこではLyckseleでの林業学校を訪問して次のように結論した。

「林業労働がもっとリスペクトを得るために職業教育が必要とされるならば、その目的はここで達成されているだろう。ここでは、Domänstyrelsenは1年間の徒弟コースを組織している。各コースには16歳から20歳までの16名の生徒が採用され、彼らはコースの終了後林業局で正規に雇われる。林業労働者は年中仕事が保障される。完全にモダンなアパートを与えられる可能性さえあり、既婚者には3部屋とキッチンが1ヶ月おおよそ80クローナーで貸し出される。」（SIA 1955:25-26, p.5）

1956年の夏に今日的な意味でいう職業教育を受けた、スウェーデンにおける初めての林業労働者がJämtlandのStavreにあるセルロース会社の林業学校を修了した。理論と実習の期間に分けられた2年間の職業教育を受けて、これらの新卒の林業労働者は直接正規に雇用されることができた。SIAでは次のように述べられている。

「スウェーデンにおける林業労働者の教育の行政が林業局に引き継がれてから、今後この教育がどうなるかの全体像を明白にする出来事はあまりなかった。（中略）Stavreでの教育は以前のイニシアティブとは長さの点で異なる。この教育の起源は林業における教育需要であり、林業の将来の職業教育にとって導きとなりうる」（SIA 1956:13, p.5）。

この徒弟教育を扱った記事は一貫して肯定的であり、林業労働者組合からは「この職業における本当の基礎教育」とみなされた。たとえばインタビューにおいて林業及び河川による運搬労働者組合の執行委員であるSven Gustavssonは「林業労働が何を意味するかについてより正しい理解を与えるから、この教育方法は正しい」と述べている。また、すでに以前に工業において行われていたものと同じ種類の職業教育に近づけ始めたと述べている（SIA 1952:2, p.13-15）。1958年の予算では企業がその教育の実習部分に対し、また基礎教育コースを自らの管理に下に置くために国家の補助金を受け取ることができるようにこのタイプの教育への予算の割り当てが増加した。それに加えて林業教育のための教師の養成への投資も予定された（SIA 1958:2, p.28）。

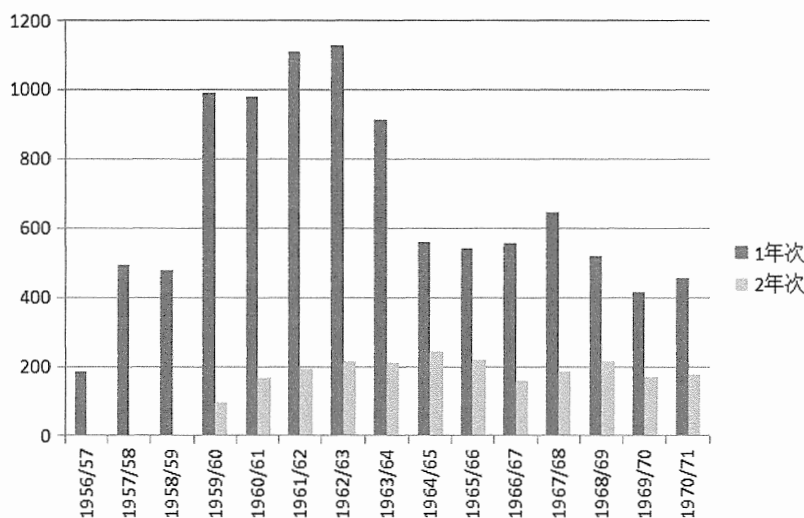


図3.6 1956年から1971年までの徒弟コースと一般基礎教育の1年次と2年次。
出典: Skogsyrkesutbildning i Sverige (1975)。

(2) 徒弟コース及び一般基礎教育（1年次、2年次） —1956年～1971年—

徒弟コース (lärlingskurs) は1956/57年度に導入された1年間の国家の補助による基礎コースであった。数年後に一般基礎教育の1年次 (allmän grundutbildning årskurs 1) と改称し、1959年にその2年次も導入された。2年次は特定化された基礎教育であり、林業保護やトラクターによる運搬、馬車による運搬、一般技術などのようなラインに分けられた。基礎教育は実習期間と座学期間の交互による教育形態を維持した。実習は林業企業と密接な連携で行われるとされ、普通教科 (スウェーデン語、数学、社会科学) の割合は全授業時間の17%に及んだ。実習に関しては林業局と林業企業その他の森林所有者が実習生を受け入れる予定であった。だが、当初の計画よりも優秀な指導者や生徒に適した作業課題を確保することが困難であった。効率的な方法ではないとして実習期間と座学期間に分けたことへの批判が次第に現れ始めた。この二つの要因から、林業職業教育委員会はその答申「林業職業教育I (Skoglig yrkesutbildning I)」(SOU 1965;67, p.67)において、その教育の改革案を提出した。その改革案は実習期間と座学期間に分けることをやめ、その代わりに林業学校におかれた授業と一体化した実習を実施することであった (“Skogsyrkesutbildning i Sverige” 1975, p.53-56)。その改革は即座には実施されず、数年間を要した。

図3.6に示すように1年次における生徒数は数年で1000名に達し、この教育は順調に開始された。1963年から1964年に起こった急激な後退の主要な要因は、

労働市場庁による農業及び林業における労働力調査が1963年に発表された際に起こった騒ぎに帰せられる。これによれば林業における労働力需要は1970年までに5万人減少するとされた。1963/64年度にすでに林業の基礎教育の1年次から10%の生徒が退学し (“Skogsyrkesutbildning i Sverige” 1975, p.24)、その翌年の生徒数は1963/64年度当初に比して50%以上減少した。その後1971年までは林業教育に対する関心は低いままであり、2年次には多くの生徒を集めることはなかった。2年次の設置後数年間が経過すると1971年まで生徒数は約200名の状態が続いた。

1971年の高校改革 (「林業教育が高校で実施される」の節参照) では、地方議会 (landsting) が林業局から管轄を受け継ぐとされた。しかし、すべての地方議会 (landsting) が林業教育を実施することにはならないことが明らかになったのは、高校改革の実施の半年前であり、とても遅かった。農業・林業・庭園のための委員会 (Kommiten för områdena jord, skog och trädgård) への林業職業委員会(SYN)による報告書では、経営者団体と労働組合双方がこれをきわめて重大な問題とみていたことが読み取れる。地方議会が林業教育に対する責任を取らなかった県においては、林業保護局が1年次の教育を続けるとされたが、新たな高等学校における教育と同等なものにならないことが強く懸念された。とはいえ、その林業教育に関する関心が急激に減少する兆しはなかった。高校の林業ラインが開始された1971年5月に約300名の生徒が基礎教育の1年次に入ったのに対し、高校の林業ラインには約200名の生徒が入学した (SYN=arkivet, F1:3)。

1972年の林業職業委員会による回状への回答においては、1年次と2年次に特別コースとして高校の枠の中に残っていた。林業企業にはこれらのコースを現代的なものにして維持することに対する関心が高かった。そこでは特に機械化された伐採や森林保護の方法が1年次の教育内容に編成されるべきとされた。特別コースを残すことにはいくつかの理由があった。一つは林業における基礎教育を希望する成人にとって受講可能であること、他の一つは林業研究所や森林技術者学校 (skogsmästarskola) に応募する人のための実践的な教育として機能させることであった。2年次には経営経済ラインと機械技術ラインと2つの形態であった。後者については伐採機械についての学習を容易にするためにその教育を再編成することが地域によって要求されていることをSYNが指摘した (SYN-arkivet, F1:2)。

(3) 統一学校の9学年の職業ライン (農業と林業) —1953年～1963年—

1950年代に職業教育が広範に議論され、産業界においては、労働力の能力の向上に対する関心が高かった。合理化によって労働力に必要とされる内容が変化していた。チームワークと協働力へのより大きな要求が教育に新たな課題を提起した。林業においても同様であった。1949/50年度に試行を開始し、1960/61年度まで行われた新たな統一学校によって (SCB Promemorior 1974:5, p.37-38)、林業の職業教育が義務教育の中に位置づけられた。林業の分野を選択することは1953/54年度にはじめて可能になったが、試行

期間の最後まで続いた (“Skogsyrkesutbildning i Sverige” 1975, p.52)。9学年では3つの異なるラインの中から生徒が選択することが可能であった。それらは、一般ラインa (allmän linje 9a)、高校準備ライン9g (gymnasieförberedande linje 9g)、職業準備ライン9y (yrkesförberedande linje 9y) であり、9yはさらに細分化されていた (SCB Promemorior 1974:5, p.37-38)。職業準備ラインは、民衆学校の補習学校と同じように生徒を「生計のための職業」へ準備することが構想された。その教育は主として職業教育であり、一般教科はおおよそ3分の1のみとされた。林業関係者はそれに対して懐疑的であった。というのはおそらく林業と農業とを一つの教育に併せ、これらの分野において農業、林業、農業・林業の三つにその教育をわけることが提案されていたからである。試行期間に1955年の林業保護調査委員会は9yの教育水準が林業の1年間の教育より低いことを指摘した。若者のためのボランティアの教育の生徒より9yの生徒が若かったことが説明として考えられたが、農業と林業を合わせた3つのラインが成績上弱い生徒を集めたことでも低い水準の説明がつく。統一学校の枠内における林業教育は控えめな量であった。9y林業・農業は平均値で年間55名の生徒がいた (“Skogsyrkesutbildning i Sverige” 1975, p.51-52)。

(4) 基礎学校における第9学年の林業ライン—1963年～1971年—

1963/64年度から基礎学校が統一学校に取って代わり、新しい学習指導要領Lg62が実施された。これは

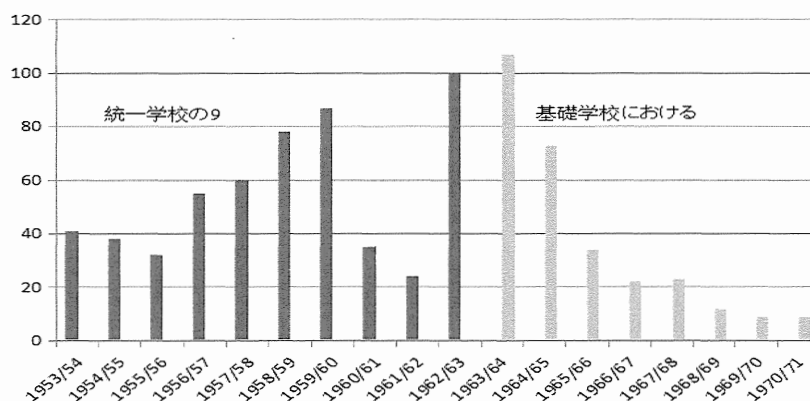


図3.7 1963年から1971年までの統一学校の9y、農業と林業と、基礎学校における第9学年の林業ラインにおける生徒数。
出典: Skogsyrkesutbildning i Sverige (1975)。

教育システムにおける他の変化と同様に漸次的に進められ、その改革は1973/74年度まで完了しなかった。新しい学習指導要領では基礎教育レベルの枠内において特殊な職業教育を行うという考え方はなかった。基礎学校の第9学年で提供される実践的なラインはより一般的な性格をもち、職業選択を延期させることを生徒に可能にした (Ejelid-Hägström 2007)。林業教育に関しては「森林の農村部の若者男性を林業に従事させることへの願望」からこのラインは独自の性格が強い第9学年の林業ラインとなった。 (“Skogsyrkesutbildning i Sverige” 1975, p.58)。林業が主たる産業の地方自治体においては、特別なライン、第9学年の林業ラインを設置することが認可された。このラインは基礎教育の1年次と同等に扱われるとされたが、林業教科のより短い教育期間と生徒の年齢について林業職業委員会は「林業職業教育I」の答申の中で批判した (SOU 1967:38)。その答申においては第9学年の林業ラインを廃止することが提案された。しかし、そのラインは生徒数を減らしながらも数年間は存続することになった。統一学校における第9学年の農業・林業ラインの生徒数と、基礎学校の第9学年の林業ラインにおける生徒数は図3.7のとおりである。

(5) 合理化・機械化、増大する教育への要求

統一学校の実験活動がはじまると、実践的に林業労働を担える人材への需要がまだ高く、林業の労働組合と経営者の双方林業に若者を誘導し、労働力の供給を確保する手段として教育をみた。前述のように林業における労働力不足によってさまざまな教育が開始された。しかし、1950年代末に別の問題が重要となりはじめた。今度は増大しつつある林業労働者の失業者群の処遇が問題になった。労働組合側からは、失業の期間を林業労働者の教育水準を高めることに利用すべきであるとし、低賃金労働力の入手が容易になったことからと林業企業と森林所有者がもはや教育に関心を失ったと批判した (SIA 1955:9, p.16-17)。数年後に林野庁と労働市場庁がともに林業労働者の失業者に対して、合計3000名の参加者を集めた200のコースを組織することを決定した時、林業の労働組合は自らの要求に対する賛同を得たように思われた (SIA 1959:4,p.6)。

1960年代初頭に林業の職業教育を実施する学校がいくつかあったにもかかわらず、労働組合側からはその教育内容に不満があった。ますます急速な機械化が林業労働者にもたらしつつある要求にその教育が応えられていないとされた。SIA誌上では、これは「教育

が必要とされる (危険なチェーンソーについて)」 (SIA 1960:8, p.19)、「未来の林業労働者はエンジンの指揮者」 (SIA 1960:23, p.15-17)、「機械の時代に直面する林業」 (SIA 1961:8, p.8)、「急激な教育の需要」 (SIA 1962:5, p.10) などのような多くの論文に反映された。

例えば小規模の林業における合理化についての論文には、中央・南スウェーデン林業労働研究所 (MSA) の指導者であるUlf Helmersによる以下のような発言がみられる。

「われわれ (林業者) は経済的に片隅に追いやられ、時間の余裕に限度があり、研究と教育の双方に緊急な需要がある。その教育はすべての範疇において行われなければならない」 (SIA 1962:5, p.17)。

そのモデルは工業にあった。工業では進歩を遂げて職業的スキルと適応能力への要求が高まったことが理解されていた。Helmersは次のような発言もしている。

「林業労働者は自らのために、かつ林業のために職業教育に対してより大きな関心を示し、林業労働者の教育に積極的に参加しなければならない。その活動は機械化された林業を目指さなければならない (同上)。

1960年代において、1950年代と同様に繰り返された問題の一つは資格をもつ教員の不足であった。機械化の程度が高まるにつれて機械技術の知識とともに教育学の能力をもった教員を確保するためには大きな努力が必要であることが明らかになっていた。SIAでは林業の教育養成のコースの宣伝が繰り返された。林業の職業教員になるためには森林技術者学校か林業学校を卒業しなければならないが、「よい一般的教養をもち、林業の基礎教育を修了し、5年間以上でよい成績をもった全面的な職業実践」のある林業労働者がいわゆる指導者コースに応募する可能性があった (SIA 1963:11, p.30)。それにもかかわらず機械テクニシャンではなく十分な林業経験をもった者が募集された。しかし、機械技術の教育を受けた者の需要は大きく「トラクター運転の資格」という論文では、Kratte

Masugn林業学校の機械技術ラインを卒業した人が卒業前からほぼ雇用されていたことが述べられた (SIA 1963:13-14, p.4)。

1966年に職業教育準備委員会が提出した答申について、林業労働者組合はSIA誌上において、新たな概念としての高校に含まれるとされた2年制の職業教育についての提案にかなり満足であることを表明した。それとともに「担当省が産業界に対して一般的に提案

する予定である教育よりも質的に劣る教育を林業に提案しているのは許さないことである」という林業労働者組合の見解も表明した。職業教育準備委員会の答申では1年目は一般理論的かつ職業紹介的であり、本格的な職業教育は2年目におかれるとされた。労働組合側からは「受けた教育をその後の賃金労働に対して最大限に生かせるために生徒は林業と関連のある職業教育と実践的な教育を受けることができないといけない」ことを指摘した。「林業労働に伴う危険性をなくすことを実際に学ぶ」ことも重要視された。また、大きな都市から離れた学校において「一般理論の知識を伝えることについて職業学校教師が十分な能力を持っているか否かが極めて」疑わしいとされた。このような学校は当時林業の職業教育において一般的であった。林業労働者組合は職業教育が1学年からすでに始まることに強い根拠があるとみなした。林業労働者組合は林業労働者が「必要で時代にあった職業技能」を修得できるように基礎的な職業教育以後に継続教育の機会が準備されることにも重点をおいた。

(6) 1971年までの農業者学校と農業学校

この論文で扱う時期においては、農業者学校と農業学校では林業経営 (skogshushållning) という名称の下で一定の林業教育が行われていた。その他の林業教育とは異なってこの林業教育は農業教育の一部として含まれ、その教科の範囲はその学校が置かれた地域の状況によっていた。農業と林業を同じ場所で行っている

地域では林業という教科は森のない地域よりも重要視された (“Skogsyrkesutbildning I Sverige” 1975, p.58-59)。厳密に言えば、この林業という教育は本論文で取り上げている他の教育と同じような林業職業教育ではなかった。

教育の量の計算は1950年から1971年までの期間にわたる。林業が盛んな学区にある民衆高等学校と同様にこれらの学校でははるか以前から林業教育が行われていた (Lundh Nilsson 2010)。農業者学校 (lantmannaskola) の名称が1963年に廃止された。その代わって1963年から農業学校 (lantbruksskola) の名称が用いられた。1971年の高校改革によって農業学校の基礎教育は2年制の高校になった。

以下の図3.8は、森林保護学校 (skogsvårdsskolor) の教員が協力した林業経営コースに関するものである。それゆえ他に林業経営教育が行われなかったとは言い切れないことがわかる。いずれにせよ生徒数はかなり多かったが、このことはその教育の範囲に照らし合わせて理解されなければならない。すなわち多くの生徒がその教育に参加したが、授業時間数の平均は一人の生徒あたりおおよそ90時間と比較的に少なかった (Skogsyrkesutbildning I Sverige 1975, p.125)。1950年代初頭における生徒の急増はおそらく林業教育に対する一般の高まった関心と関連があろう。それに対して1960年代初頭における相対的に急速な増加は説明することが難しい。その後の生徒数の減少はおそらく次節で扱う新たな林業ラインへの移行と関連している。

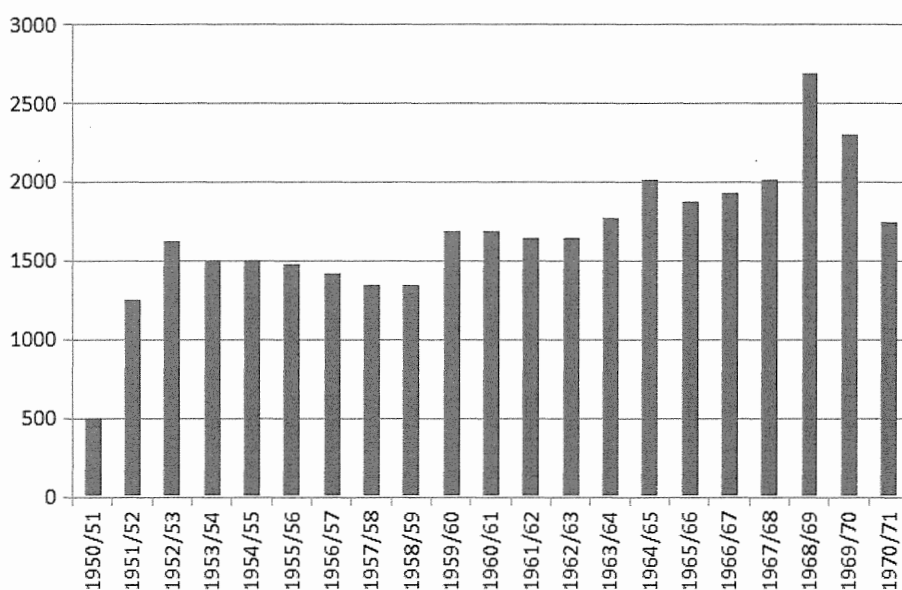


図3.8 1950年から1971年までの農業者学校と農業学校における生徒数。
出典: Skogsyrkesutbildning i Sverige (1975)。

林業基礎教育が高校レベルになった

1960年代は部分的には林業職業教育の確立期であった。たとえば企業内学校や若者のための12週間の短期コースなどいくつかの教育がなくなった。いわゆる林業補習学校 (skogsbetnad fortsättningsskola) の最後の生徒は1969年に修了し、統一学校のライン9yが基礎学校の第9学年の林業ラインに1963年になった。しかし、基礎教育(1学年と2学年)は1971年の高校改革と関連して高校レベルの林業職業教育になるまで一定期間存続した。1970年の学習指導要領(Lgy70)の登場によって基礎学校から林業職業教育がなくなり高校に移転され、2年制の教育になった(職業教育にとっての高校改革の意義については第2章参照)。

(1) 林業の利害関係者と新しい教育

前述の林業職業委員会(SYN)は労働市場の両側を代表し、新たな職業教育への準備と移行に積極的に参加していた。SYNは回状機関として機能し、林業企業と林業労働者組合による全体的な問題と詳細な問題についての意見を回収しまとめる任務をもっていた。林業職業教育が高校教育レベルの教育になることに対してSYNは原則としてはとても肯定的な態度であったが、とりわけ文部省とのやりとりからはSYNの構成員は学校設置者の問題の解決が長引くことについて非常に懸念していた(SYN-arkivet F1:13)。学校監督庁が監督機関となり、地方議会(lansting)が林業教育の設置者となるとされていたが、設置者の問題は改革を導入する際にまだ全国的に未解決の問題であった。むしろ新たな組織が実施される前に処理し調整されなければならない利害関係問題が多かった。設置者問題についての懸念を表明するために多くの林業企業がSYNに連絡した。たとえばスウェーデン・セルロース株式会社の人事部長であるJohn-Erik Magnussonは、SYNへの報告書の中で数年前にその会社の企業内教育を止め、満足した解決策をもってその教育を林野庁に任せたと書いている。新たな組織では4つの地方議会と共同作業をしなければならないとされた。Magnussonはそれまで(1971年1月時点まで)の連絡ではこの4つの地方議会がその会社の計画、需要、課題を了承したこと以上に具体的な進展がないと苦情を述べた(SYN-arkivet F1:1)。

もう一つの大きな問題は補習教育と継続教育の大きな需要にどう対応するかであった。ここでも懸念されたのは高校への移行によって現状が悪化することへの

懸念であった。林業経営者団体(Skogsbrukets Arbetsgivare)は、たとえば「職業教育の管理」の答申への回状の中で「それがなければ林業は国内の多くの場所で満足できる利潤による運営ができないので、生産の発展と生産性の発展の」ために継続教育と補習教育が重要であることを主張した(SYN-arkivet F1:1)。林業局はその回状で「本局はこれらの教育を学校改革に際して忘れてはならないと強く主張したい」と書き、林業経営者団体と同じ立場をとった(SYN-arkivet F1:3)。ある報告書の中でスウェーデン・セルロース株式会社(SCA)は、教育問題について次のように述べた。

「SCAの林業における最近の主たる教育は、現役の林業労働者の補習教育になるだろう。(中略)現在の規模と比較すると、機械オペレーターの教育需要が1971年から急激に増加する見込みである。この傾向は一般的なようである」(SYN-arkivet F1:1)。

補習教育の需要が大きく、林業企業が資金不足を懸念していたことはSCAが当時約2800名の単純労働者と約700名の機械労働者をもっていたが、1970年代半ばまでにその逆になると同時に従業員が約600名減少すると予想されたことからわかる(SYN-arkivet F1:1)。

林業職業委員会の側が懸念していたのは、林業教育が高校の一環となるとそれまで築き上げられてきた学校と産業界との連携が悪化することにあった。しかし学校監督局の側からはKjell Johnsson局長が会議での報告において「この変化は林業代表者からの、これまでにあったよりもより強力な関与が必要である」と主張した(SYN-arkivet F3:1)。彼はまた補習教育と継続教育のために生徒の出席日数(elevdag)の増加を約束し、その教育を林業の需要に合わせることを主張した。機械オペレーターの今後の教育については、機械の販売との関連で教育に責任を持つ機械製造者にも任せたと(SYN-arkivet F3:1)。

(2) 林業ラインと特別コース—1971/72年度～1975/76年度—

林業教育は高校改革によって2年制の林業ラインが創設されることになった。高校への移行はある地位をその教育に与えた。その改革の実行の直前の会議の報告において学校監督局の局長であったInge Jonssonは、以前に募集に問題があったところに林業教育への志願者が増えたことや、その増加は各学校の定員数を上回ったことに対して満足を表明した。この高まった関心は林業教育が生徒によって好評を得たことに部分的には

関連している。1974年の学校監督局と統計局による職業ラインの評価では、その他の職業ラインよりも林業ラインの生徒が教育に対して満足していることが明らかになった (SIA 1976:1, p.20)。

新たな高校教育は、性格教科以外の教科の時間数がかなり少ないという特徴を明白にもつ職業教育であった。性格教科は機械学、森林生産、伐採および運搬、計測および材料学、自然保護、人間工学であった。各教科の専門的な知識と技能以外に最初の4つの教科において生徒には次のようなことが期待された。

- ・さまざまな種類の安全規定とその適用について理解を得ること
- ・職場における社会的関係を観察し分析する能力を発達させること
- ・職業や職場の状況の可変性について理解を得ること。(Lgy70, p.6-7)

林業教育全体の目的として生徒に対して次のような期待が掲げられた。

- ・卒業後林業における作業を質、安全性、効率に関して満足する方法で遂行できること
- ・林業において普通にある手工具と半自動機械、簡単な機械を扱い、保全することができること
- ・林業の運営の一般的な前提について知り、様々な作業の間の協力の重要性を理解し、林業企業の経済的な前提を知り、企業内の合理化と変化について理解すること
- ・林業や隣接職業領域において継続教育を容易にするような基礎的知識をもつこと。(Lgy70, p.9)

この教育の目的には労使双方からの影響を受けた明白な痕跡があった。進行中の林業の効率化は「合理化と変化について理解すること」を必要とした。これはおそらく経営者側からの働きかけによる影響であろう。各場面における安全性の重視もまた同様であり、この場合は林業労働者組合側からの影響である。労働環境問題に取り組んでいたInge Johanssonによれば、労働組合が早くから労働環境問題に注目したという。

「組合における労働環境問題について取り組んできた私の先行者である、Inge Johanssonは労働環境の教育を実現させるために組合の中で懸命に努めたと私に語ったことがあります。ですから経営者よりも労働組合側の関心だったでしょう。」

労働環境問題に対する労働組合の関心は林業の機械化の増大によって弱くはならなかった。逆にアレルギーを引き起こす油を利用する問題から林業機械における人間工学的な問題まで機械化によって新たな労働環境

問題が注目された。

高校で提供されたラインとその分野以外にも多くの特別コースがあった。林業教育に関しては、この特別コースは以前の補習教育と継続教育コースが一定の修正を経て高校に移されたことを意味する。1972年4月4日の学校監督局への回状のなかで、林業職業委員会はこれらのコースについて次のように述べている。

「生徒の知識や技能のレベルや、各林業労働者の作業における急速に変化した職業上の必要を考慮して、この産業の企業やその従業員が必要と考える教育需要にコースを適応させる。」(SYN-arkivet F1:3)

林業職業委員会はコースの一部に現代化の必要があると指摘した。要するにこの現代化は林業の機械化にともなった知識と技能への要求における変化について扱っていた。

特別コースの期間は数日間から1年間まで多様であった。短期コースの中に、切断技術 (aptering)、機械保全、伐採技術があり、長期コースの中に名称にもかかわらず成人向けの1年間の林業基礎教育と選択可能な2学年目において経営学 (driftsekonomi) か技術か監督者のコースがあった (SYN-arkivet F1:3)。多くの生徒は半年よりも短い期間のコースに参加した。1971/72年から1975/76まで年間平均約225名の生徒が1年間以上のコースに在籍していた。同期間に年間2000名から3500名の生徒が特別コースに在籍していた (図3.9参照)。特別コースとより高いレベルの特別コース (högre specialkurs) は技術発展による補習教育と継続教育の需要を満たすとされ、絶えざる修正の対象であった。

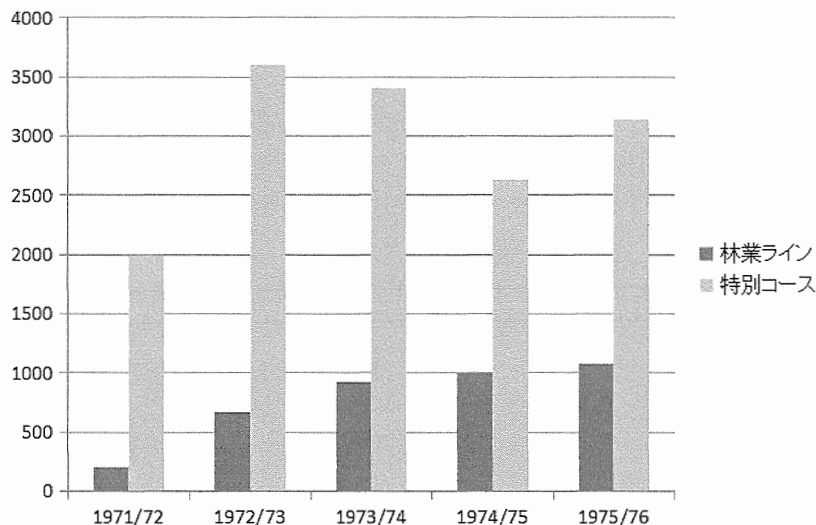


図3.9 1971/72年から1975/76年までの高校の林業ラインと特別コースにおける生徒数。出典: Statistiska meddelanden serie U。

教育の量の総量

1971年の高校改革までの林業教育がさまざまな形態をとっていたことを以上にみてきた。本節では、これらの教育について定量的なまとめを提示する。わかりやすくするために基礎教育とその他の教育とにわけ、後者には継続教育と、農業者学校と農業学校における林業教育が含まれる。

教育の定量化に関しては三つの方法がある。前述においては生徒数を尺度として用いてきた。この尺度は林業教育について一般的な関心の程度を示す。しかし、教育の期間や各生徒がどれほどの教育を受けたかについては何も語らない。これらの因子を調査するために、生徒の通学日数 (elevdagar) と生徒一人当たり通学日数という尺度を用いる。後者の場合、各年度において与えられた教育に対して一年間の平均値が算出される。

(1) 基礎教育

1950年代初頭の生徒数の激増は第二次世界大戦中にすでに顕著になり始め、1950年代の大半において問題であり続けたところの、林業における労働力不足への一つの反応としてみることができる。生徒数と生徒の通学日数の増加は、父親から息子へまたは兄から弟へと伝播される伝統的な教育に対置される、公的な教育への一般的な発展動向を反映している。チェーンソーが本格的に普及したのも1950年代であり、危険性をともなう職業がさらに危険になり、さらなる教育が必要になった。1950年代末の景気後退と1950年代と1960年代に進んだ林業の機械化によって林業労働者の需要が減った。1963年に労働市場庁が提出した

調査報告書が林業職業教育に対する関心に負の方向の影響を与えた。林業における労働力需要は1970年までに約50000名減少するという予測が示されたことを考えると、林業に将来性をみた若者が少なくなったのは当然の反応であった。図3.10からは、新たな高校へ移行している時期に林業基礎教育における生徒数が非常に少なかったことがわかる。それは林業ラインの生徒が1学年目を始めると同時に他の教育が次第になくなりつつあったことの反映である。しかし、1971/72年度の激減は高校への移行の際に統計に欠落があったことに原因を見なければならない。

教育期間に関しては一人の生徒あたりの通学日数が1960年代まで若干増える傾向にあった。その後は新たな2年制の林業ラインが1971/72年度に導入されるまで若干の減少がみられる。1971年の高校改革まで平均値は一人の生徒あたりの通学日数は125から175であったが、高校への移行によって急に教育期間が2倍になった。

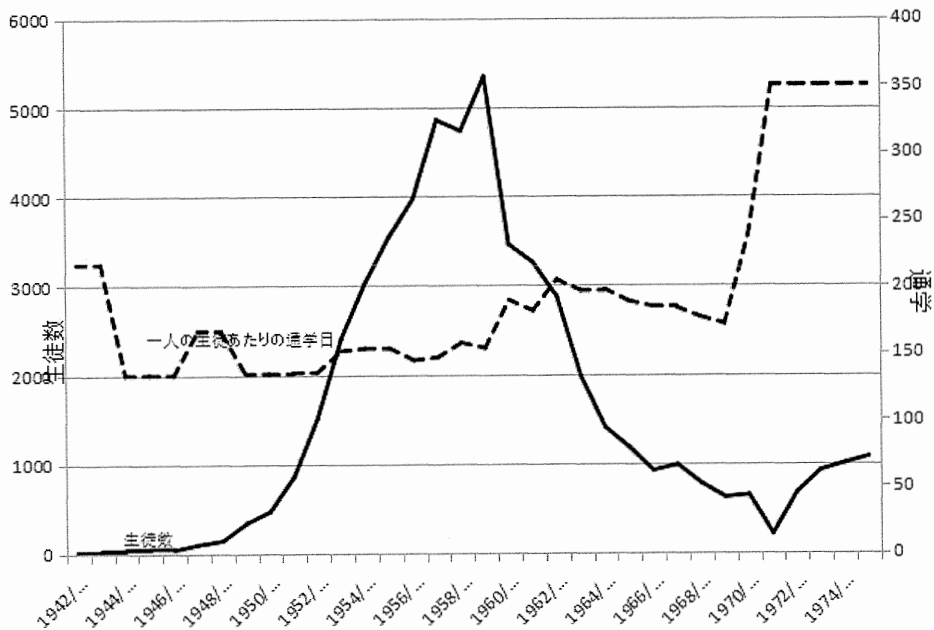


図3.10 1942/43年から1975/76まで林業の基礎教育—生徒数と通学日数。出典：1940年から1970年までの時期についてはSkogsyrkesutbildning i Sverige (1975)参照。1971年から1976年までの時期についてはUtbildningsstatistisk årsbok(1978)参照。

(2) その他の教育

すでに述べたように、林業労働者への教育投資は労働現場におけるインストラクター・コースとして始まった。ただ、林業教育における補習教育という概念が明確化されたのは1950年代末であった。補習教育は林業企業、森林所有者組合、林業局によって行われたが、国家からもサポートされた。補習教育と継続教育は森林保護局に徐々に移管されていった。これらの教育は一人の生徒あたり平均4日間と通例は短期であった。生徒数は1955/56年度に約20000名で、最大生徒数は1966/67年度に約27000名であり、その教育の量が多かった。その教育の大部分がすでに職に就いている林業労働者を対象にしていたために、生徒数は1950年代のチェーンソーの教育需要や1960年代末、1970年代初頭に高まった枝の切り落とし、切り分け、切り倒しの機械化を反映している。

「その他の教育」における参加者数に関しては、農業者学校と農業学校の枠内でなされた教育で継続教育としてなされたものである。農業者学校と農業学校は平均して「その他の教育」の約10%を占めるに過ぎなかった。しかし、これらのコースにおいては一人の生徒あたりの通学日数がかなり多かった。平均値は16日間であった。

基礎教育と継続教育—必ずしも同位相ではない

1940年代末に顕著になりはじめ1950年代に大きくなった教育の需要は基礎教育と当時の支配的であった現職林業労働者のための継続教育コースの両方に反映された。図3.11では二つの種類のコースの推移が比較されている。1950年代半ばまでに両方の教育が急速に増加した。その後、「その他のコース」の参加者数が減少し、徐々に平行線になっていったのに対し、基礎教育の生徒数は5年間増加しつづけた。しかし、1959/60年代以降基礎教育の生徒数は継続的に減少し、「その他のコース」の参加者数は高い水準であり続け、1960年代半ばに急増した。1960年代末に基礎教育の生徒数が横ばいになり、主として継続教育のコースの参加者数が急減した。

基礎教育と「その他の教育」は時期によって異なる方向に進んだ理由は何であろうか。おそらく複数の理由があるだろう。第一に教育システムに一定の制度的慣性があることである。ある教育の需要が明らかになってからその教育が実施されるまで通例ある程度の期間が必要である。実施する前にその需要が減少することもありえる。第二にそのコースは異なるグループを対象にしていたことである。基礎教育は主として将来林業に就くことを希望する若者を対象にしていた。これらの教育の生徒数は長期的にみれば景気の循環によっていたが、直面している技術教育の需要を反映しなかつ

た。農業者学校と農業学校の林業コースはより広範な農業教育の一環であった。その教育は主として両親から林業と農業の双方を受け継ぐ予定の者を集めていた。他方で、継続教育コースは年齢を問わず現職の林業労働者を対象にし、時期による参加者数の変化はおそらく基礎教育コースの場合よりも技術の発展を反映しているであろう。1950年代初頭における継続教育コースへの参加者数の急増は、上述のようにチェーンソーの発展と機械による木の皮を剥ぐことへの移行によるものであった。1950年代の景気低迷によって部分的に教育の需要が徐々に満たされた。1960年代初頭には機械による枝の切り落としと幹の切り分けが、また次第に機械による切り倒しが導入された。新たな機械は操作と修理と保全に対して教育が必要であり、この

ことは継続教育コースの参加者数の急増に反映された。林業において次第に加速した技術発展そのものは1960年代の合理化の要請の帰結であった。その合理化によって労働力の需要が低下すると同時に残る林業労働者に対する高い生産性の要求が高まった。おそらく継続教育コースは合理化の過程において大きな役割を果たしたであろう。というのは、新たな技術への急速な移行を可能にし、上述のように1960年代後半では生産性が年間12%以上向上することができたからである。したがって1960年代には労働者を教育する強い動機が林業の経営者にあった。労働力の需要が低下するにつれて将来林業に就くことを希望する若者が減少することによって1960年代を通して生徒数が継続的に減少したことへの説明が可能になる。

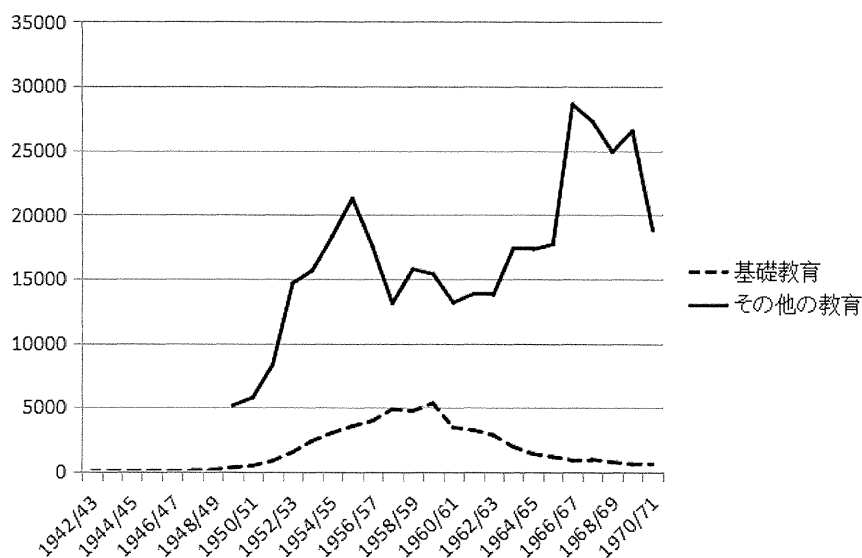


図3.11 1942/43年から1970/71年までの基礎教育とその他の教育における生徒数。
出典: Skogsyrkesutbildning i Sverige (1975)。

最後のコメント

1971年の高校改革が実施されるとまもなく全体として批判を受けるようになった。例えば労使は職業教育の質が概して低すぎるとの見解であった。ライン、ブランチ、特別コースの大量な提供は解りにくく費用がかかりすぎるものとして批判された (Lundahl 2008, p. 37)。それゆえ1984年に高校教育の発展や改革の必要性を検討するために高校教育再検討専門家委員会 (Expertgruppen för översyn av den gymnasiala utbildningen) が任命された (SOU 1982:2, p. 15)。林業に関しては教育の編成にほとんど満足し、根本的な再編の必要は実際になかった。しかし改革の提案がなされた。これらの提案は簡潔に言えば、ますます注目を集めてきた林業労働者の健康問

題と林業機械の絶えざる発展を反映したものであった (SOU 1982:2, p. 160-161)。

1971年の高校職業教育と、ÖGYが提案して1992年の高校改革と関連して実施された教育との大きな相違点は職業ラインが3年制になったことにある。3年制の教育はさまざまな職業の諸条件に職業教育をあわせる可能性を高めると考えられた。したがって3年目は労働現場におかれた教育と、専門化や理論的知識の補足の両方に充てることができるとされた (SOU 1986:2, p. 131-132)。しかし1992年に3年制の職業ラインが導入された際には、林業ラインへの関心が1980年代半ばから継続的に弱まっていた。激減した生徒数は林業の効率化および林業労働者を希望する若者がますます減少したことを反映していた。

後者の傾向は続いてきたが、林業は今日でも職業訓練を受けた労働力を確保する困難に直面している。Älvdalen教育センターで教師かつプロジェクト・リーダーでもあるAnders Öbergによれば、若者におけるその職業の魅力の少なさの原因は一部は低い賃金、一部は今日の林業労働において一人での作業が多いことにある。

「暗闇の中で機械に座っているには（中略）ある性格がなければ耐えられません。」

職業的知識への要求が高まってきたことにつれて、林業ラインはその内容がますます高度で難しくなったが、その教育を行うために十分な事前知識をもった若者を基礎学校から引き寄せることが困難になった。基本的な技能を教えることができる父親や兄が存在しただけで十分であったという時代ははるかに過ぎ去った。今日の林業労働者への要求についてAnders Öbergは次のように述べる。

「これはハイテックです。私たちは、コンピューター・オペレーターや技術のオタク、経済の教授、緑の哲学者であることを人に要求しています。森の中に出たときはさまざまことが要求されるので、これらの素養を持たなければなりません。」

注

1. Åke Pettersonへのインタビュー（2010年9月3日）。
2. ここでは機械化の度合とは、手動器械を用いた伐採など（Motormanuell huggning）にかかる時間として測る労働の割合においてどの程度が機械化されたかの割合を意味する。
3. 一年中働いている林業労働者数の計算の難しさについての詳細な議論はKarlbohm（1968, p.319-p.322）も参照せよ。
4. Åke Pettersonへのインタビュー（2010年9月3日）。
5. 同上
6. Kjell Jonssonへのインタビュー（2010年9月8日）。
7. 同上
8. Skogsyrkesutbildning i Sverige（1975）p.44-p.45を参照。
9. 今日の貨幣価値では約1085クローナーに相当（2013年3月）
10. 林業職業教育委員会は、1966年に答申を提出した職業教育準備委員会と協議した。林業職業教育委

員会の副書記は農業、林業、栽培業（trädgårdsnäring）セクターのための教育を扱う職業教育準備委員会の作業グループに協力した。

11. 林業職業教育委員会には、林業局、林業経営者組合（Föreningen skogsbrukets arbetsgivare）、林業および農業経営者組合（Skogs- och lantarbetsgivareföreningen）、スウェーデン森林所有者組合連盟（Sveriges skogsärgareföreningars riksförbund）、スウェーデン林業労働者組合（Svenska skogsarbetareförbundet）が含まれた。SYNの主要な責任の中には、林業における教育と採用を促進すること、教育ガイドラインの開発に参加することがあった。
12. Lgy70では、1学年はたとえば週4時間のスウェーデン語を学んだのに対し、2学年はこの授業はなかった。その他の非専門的な教科（体操と専門教科以外の週3時間の選択教科）は1学年では6時間、2学年では5時間であった。
13. Inge Johanssonへのインタビュー（2010年8月31日）。
14. 同上
15. 初期における相対的に高い値は企業学校がその際に教育を開始したことによる。その後の顕著な減少は林業向けの補習学校が導入されたからである。その学校は短期の教育で定時制で行われたものである。
16. Anders Öbergへのインタビュー（2010年9月1日）。
17. 同上

参考文献

(1) 公文書館所蔵史料

Skogsbrukets yrkesnämnd (SYN):

F1:1 Skogliga gymnasieutbildningen 1970-talet.

F1:2 Skogliga gymnasieutbildningen 1970-1974.

F1:3 Skogliga gymnasieutbildningen 1970-1974.

(2) 官公庁出版物

Kungliga Skogsstyrelsen: Det enskilda skogsbruket 1942 - 1950.

Läroplan för gymnasieskolan, Lgy70, Supplement, 2-årig skogsbrukslinje, Stockholm: Utbildningsförlaget.

Läroplan för gymnasieskolan Lgy70. II Supplement 68. Skolöverstyrelsen 1980.

SCB Promemorior, 1974:5. *Elever i obligatoriska skolor 1847-1962.*

Skogsstatistisk årsbok 1951–1977.

SOU 1954:11, *Yrkesutbildningen*, betänkande avgivet av 1952 års yrkesutbildningssakkunniga. Stockholm 1954.

SOU 1965:67 *Skoglig yrkesutbildning I*, betänkande avgivet av skogsbrukets yrkesutbildningskommitté. Stockholm 1965.

SOU 1966:3, *Yrkesutbildningen*, betänkande avgivet av 1963 års yrkesutbildningsberedning. Stockholm 1966.

SOU 1967:38 *Skoglig yrkesutbildning II*, betänkande avgivet av skogsbrukets yrkesutbildningskommitté. Stockholm 1967.

SOU 1986:2 *En treårig yrkesutbildning. Riktlinjer för fortsatt arbete*. Betänkande från arbetsgruppen för översyn av den gymnasieala yrkesutbildningen. Stockholm 1986.

SOU 1986:3 *En treårig yrkesutbildning. Beskrivningar och förslag för utbildningssektorerna*. Betänkande från arbetsgruppen för översyn av den gymnasieala yrkesutbildningen. Stockholm: 1986.

Statistiska meddelanden:

SMU 1972:25.

SMU 1973:5.

SMU 1973:18.

SMU 1973:38.

SMU 1974:7.

SMU 1974:55.

SMU 1975:7.

SMU 1975:50.

SMU 1976:2.

Utbildningsstatistis årsbok 1978.

(3) 機関誌

Skogsindustriarbetaren (SIA) 1939–1977.

(4) 文献

Andersson, S. (2004), “Skogsteknik förr och nu”, *Skogshistoriska sällskapets årsskrift* 2004.

Hjelm, J. (1009), *Skogsarbetaren och motorsågen - en studie av arbetsliv och teknisk förändring*. Arkiv avhandlingsserie, 35. und: Arkiv.

Karlbom, T. (1968), *Skogens arbetare - Till minnet av Svenska skogsarbetarförbundets 50-åriga verksamhet 1918-1968*, Stockholm: Skogsarbetarförbu

ndet.

Lundahl, L. (2008), Skilda framtidsvägar – perspektiv på det tidiga 2000-talets gymnasiereform, *Utbildning & Demokrati*, 2008, vol. 17, nr. 1, p.29–51.

Lundh Nilsson, F. (2010), “Den svenska folkhögskolans yrkesinriktade utbildningar 1968–1940”, I Lundh Nilsson, F. och Nilsson, A., *Två sidor av samma mynt - folkbildning och yrkesutbildning vid de nordiska folkhögskolorna*. Lund: Nordic Academic Press.

Schön, L. (2012), *En modern svensk ekonomisk historia - tillväxt och omvandling under två sekel*. Stockholm: SNS Förlag.

Skogsyrkesutbildning i Sverige (1975), Skolöverstyrelsen och Skogsstyrelsen. Karlsham: Lagerblads.

Wallenius, R. (1994), “Motorsågen kom - och försvann”, I *Skogshistorisk tidskrift* 1994.

(5) インタビューの対象者の氏名と実施日

Borg, Per (2010年9月6日).

Falk, Erik (2010年9月2日).

Johansson, Inge (2010年8月31日).

Jonssonm Kjell (2010年9月7日).

Pettersson, Åke (2010年9月3日).

Öberg, Anders (2010年9月1日).

(6) インターネット

Ejelid-Häggströ, E. (2007), “Historieämnets utveckling i grundskolans läroplaner”. <http://epubl.luth.se/1402-1773/2007/058/LTU-CUPP-07058-SE>. pdf. 2011年4月6日閲覧.

付録1 1943年から1975年までの林業関係の教育

	1943	1944	1945	1946	1947	1948	1949	1950	1951	1952	1953	1954	1955	1956	1957	1958	1959	1960	1961	1962	1963	1964	1965	1966	1967	1968	1969	1970	1971	1972	1973	1974	1975		
Företagskolor	X	X	X	X	X	X	X	X	X	X	X	X	X	X	X	X	X	X	X	X	X	X	X	X	X	X	X	X	X	X	X	X	X	X	X
Skogsbetonad förtätnings- skola		X	X	X	X	X	X	X	X	X	X	X	X	X	X	X	X	X	X	X	X	X	X	X	X	X	X	X	X	X	X	X	X	X	X
10 månaders ungdomskurs				X	X	X	X	X	X	X	X	X	X	X	X	X	X	X	X	X	X	X	X	X	X	X	X	X	X	X	X	X	X	X	X
Skoglig ung- domskurs, 12 veckor						X	X	X	X	X	X	X	X	X	X	X	X	X	X	X	X	X	X	X	X	X	X	X	X	X	X	X	X	X	X
Enhetskola linje 8 y, jord- och skogsbruk										X	X	X	X	X	X	X	X	X	X	X	X	X	X	X	X	X	X	X	X	X	X	X	X	X	X
Allmän grund- utbildning lärlingskurs, åk1 och åk2												X	X	X	X	X	X	X	X	X	X	X	X	X	X	X	X	X	X	X	X	X	X	X	X
Grundskola linje 9 skog																		X	X	X	X	X	X	X	X	X	X	X	X	X	X	X	X	X	X
Lantmanna- och landbruks- skolor	X	X	X	X	X	X	X	X	X	X	X	X	X	X	X	X	X	X	X	X	X	X	X	X	X	X	X	X	X	X	X	X	X	X	X

付録2 インタビュー対象者の紹介

Per Borgはskogsmästareの経験があり、林業職業委員会で事務局長の経験がある。彼は林業職業委員会で労使間の協働について洞察に富んだ話を聞かせていただいた。

Erik Falkは1950年代に、最初はVästerbottenの森林保護局、その後は林野庁で教育問題に取り組んだ。1983年から1984年まで林野庁で臨時の庁官代理を務めた。彼は森林保護局や林野庁による林業教育問題についての見方や取り組み方についての洞察に富んだ話によって本研究に協力して下さった。

Inge Johanssonは学校卒業直後に林業に就いた。17歳ではチェーンソーを用いた作業のコースを受講し、また次第に労働組合運動に参加していった。1970年代末に林業労働者組合にオンブズマンとして雇用され、教育と労働環境問題に取り組むようになった。

Kjell Jonssonは13歳で林業に就いた。後にskogsmä

stareになり、職業生涯の大部分を林野庁と学校監督局で務めた。彼はとりわけ林業職業教育Iと林業職業教育II (SOU 1965:67; SOU 1967:38) の調査委員会で書記を務め、後に学校監督局で林業職業教育の発展に責任をもつ部長としての地位を得た。

Åke Petterssonは15歳で林業に就き、Inge Johanssonと同様にまもなく労働組合運動に関心をもち、1970年前後にオンブズマンとして働き始めた。彼はInge Johanssonと同様に、林業労働の経験と林で働いた人たちとの長期にわたるかかわりあいを通じて、林業での作業の様子や、現代の林業にふさわしい教育をうちたてることに特に関連した問題について優れた見解を示して下さった。

Anders ÖbergはÄlvdalen教育センターの森林に対するある目的をもったライン (naturbrukslinjen med inriktning mot skog) において教師かつプロジェクト・リーダーであり、現代林業における技術と組織の発展についての知識で本研究に協力して下さった。